

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 4 月 15 日現在

機関番号：32644

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2011～2012

課題番号：23830076

研究課題名（和文）現代日本における地域共同体の変容と青年集団—東日本大震災に直面して

研究課題名（英文）Transformation of Local Communities and Youth Groups in Japan after Great East Japan Earthquake in 2011

研究代表者

辻 智子 (TSUJI TOMOKO)

東海大学・課程資格教育センター・講師

研究者番号：20609375

研究成果の概要（和文）：本研究の主たる目的は、東日本大震災に直面した地域社会の変容・地域共同体の再編の経過をそこに暮らす青年の視点からとらえ、その過程における＜青年個人／地域青年集団／地域を越えた青年集団のネットワーク＞の足跡を記録するとともに、地域社会にとって、および現代日本の青年たちにとって地域青年集団が果たす役割とその意味を考察することにあつた。本研究によって、被災地内外において青年たちが東日本大震災をどのように経験し、そのなかをどのように生きぬいてゆき、さらに今後をどのように展望していこうとしているかを具体的に聴くことができた。それを記録化し、青年たちと日本青年団協議会との共同の取り組みとして冊子『生きる～東日本大震災と地域青年の記録～（第1号／第2号）』（編集委員会編、2012年／2013年）をまとめた。そのことによって記録はより多くの人々と共有するものとなった。このような記録化の取り組みも含め青年団の全国的なネットワークは、被災地への支援活動や被災地の青年たちとの交流・学習を促し、そうした経験を通して一人ひとりの青年が自らの生活や地域を見つめなおしてゆくことを支えていることがわかった。また、各地域の青年集団には歴史的経緯があり、例えば岩手県陸前高田市には60年におよぶ地域青年団活動の蓄積があるが、そのことと現在の地域のネットワークは深くかかわり、災害復旧・復興過程における共同生活や異なる立場の住民どうしの意思疎通、自治を対話的・協力的に進めてゆくことと地域青年集団との浅からぬ関係が示唆された。

研究成果の概要（英文）：The main purpose of this study is to describe the process of reconstruction of communities in the affected areas from the point of view of young people. In these areas, there are traditional youth groups (SEINENDAN). In Rikuzentakata City and Otsuchi City, some members of local SEINENDAN who were also victims worked to search bodies and to manage shelters as volunteers while being helped by many young people from all over the country under the network of SEINENDAN. This study tried to hear their experiences and to record them, and made two books recording proceedings based on the hearing and writing by themselves. It is found that young people are looking again their communities and their role in their communities. In addition this study discovered some historical records about Rikuzentakata SEINENDAN, which is composed of several local young groups. Because there is a history more than fifty years in Rikuzentakata SEINENDAN, many people in the city acted as members of SEINENDAN in their youth. In the process of reconstruction of communities, the network through the SEINENDAN worked effectively.

交付決定額

(金額単位：円)

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|----------|-----------|---------|-----------|
| 平成 23 年度 | 1,200,000 | 360,000 | 1,560,000 |
| 平成 24 年度 | 1,300,000 | 390,000 | 1,690,000 |
| 年度 | | | |
| 総計 | 2,500,000 | 750,000 | 3,250,000 |

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学、教育学

キーワード：地域、地域共同体、地域社会、東北、青年団、日本青年団協議会、生活記録、東日本大震災

1. 研究開始当初の背景

2011年3月11日に発生した東日本大震災が襲ったのは、農林漁業を主たる産業基盤とし、地域共同体としての人間関係が色濃く残る地域であった。これらの地域には、伝統的な地域青年団(青年会などとも呼称)が集落・市町村単位で存在し、その土地の伝統的な芸能の継承や祭礼の実施、地域社会への貢献、様々なボランティア活動、青年どうしの交流・学習活動を積み重ねてきていた。こうした既存の地域青年団は、今回の大震災に直面し、どのようにその姿や活動を変容させてゆくのか、また地域青年団の存立基盤である地域共同体それ自体はどのように変容してゆくのかが目まぐるしく注目を集めている。これは社会教育研究上の課題であると同時に、震災からの復旧・復興の過程における現実的な課題とも実践的にかかわっており、まさに現時点において取り組まねばならぬテーマであると考えられた。

また青年・若者をめぐる昨今の議論や研究は、都市部の青年とその貧困問題(ワーキングプア)、「フリーター」「ニート」「ひきこもり」といった言葉で表象される状況に関するものに焦点化され、農林漁業を生産基盤とする地方の若者たちの現状については相対的に言及が少ないという状況があった。他方で、若者の自立をめぐる文脈においては、「ボランティアなグループ参加が人間を育てる」との視点から集団活動を通じた成長支援(ユースワーク)が注目を集めており、しかしそれは都市部の若者の緩やかな関係性についての研究に限定され、地方や農山村部に生活する青年の集団的活動についての研究は歴史的研究を除けばほとんど見受けられない状況でもあった。

2. 研究の目的

本研究の目的は以下の3つである。

- ①大災害(東日本大震災)に直面した地域社会の変容・地域共同体の再編の経過をそこに暮らす青年の視点からとらえる。
- ②その過程における、a)地域青年集団、b)地域青年集団メンバー個人(元メンバー含む)、c)地域青年集団の地域を越えたネットワーク(日本青年団協議会、以下日青協)の足跡を記録する。
- ③地域社会にとって、および現代日本の青年たちにとって地域青年集団が果たす役割とその意味を考察する。

3. 研究の方法

(1)継続的なヒアリング

地域青年団メンバー(被災地域/支援地域)と日青協事務局職員の現在を継続的に把握するためヒアリング(グループでの座談会含む)を実施した。主なヒアリング等の経過は次の通りである。

<平成23(2011)年度>

6月、日本青年団協議会(以下、日青協)事務局長・局員。日青協の被災地ボランティア派遣同行。8月、岩手県盛岡市で青年団員ヒアリング(座談会)。宮城県仙台市で青年団員ヒアリング(座談会)。福島県福島市で青年団OBインタビュー。9月、日青協岩手県陸前高田市ボランティア派遣同行。10月、岩手県陸前高田市青年団体協議会第55回青年芸能祭参加。11月、東京で陸前高田市の青年団員インタビュー。日青協事務局ヒアリング。12月、岡山県青年会館で岡山県青年団体協議会の震災支援活動ヒアリング。1月、石川県青年会館で石川県内青年団員の支援活動ヒアリング。宮城県中新田町で宮城県青年団連絡協議会主催第34回宮城県青年問題研究集会参加。県内青年団員とOBヒアリング。特別分科会「震災を語り継ごう」参加。2月、岩手県上閉伊郡大槌町で大槌町青年団体連絡協議会「復興の集い」参加。東京の日本青年館で大阪府泉佐野市青年団連絡協議会、岸和田市青年団連絡協議会の支援活動ヒアリング。3月、東京で福島県浪江町出身の青年団OB(秋田県在住)ヒアリング。第57回全国青年問題研究集会に参加。問題別集会「それぞれの3.11～東日本大震災を語る～」開催。

<平成24(2012)年度>

4月、岩手県盛岡市で岩手県青年団体連絡協議会第62回定期大会開催、『生きる』第1号合評会。陸前高田市米崎小学校仮設住宅自治会集会所で自治会長(青年団OB)ヒアリング。7月、宮城県高原町青年団「灰プロジェクト」実行委員会の宮城県訪問(南三陸町および山本町の青年団体への支援金贈呈と交流・ボランティア活動)同行。9月、東京で陸前高田市青年団体協議会/NPO法人桜ライン311メンバーヒアリング。10月、陸前高田市青年団体協議会主催第56回青年芸能祭参加。11月、宮城県仙台市でヒアリング(岩手県大槌町、宮城県気仙沼市、同登米市、同角田市、福島県会津若松市から参加)。1月、静岡県で第55回静岡県青年問題研究集会参加。陸前高田市青年団員講演会、震災分科会開催。第57回鳥取県青年問題研究集会で陸前高田市青年団員(NPO法人桜ライン311事務局長)講演会。北海道札幌市で北海道青年団体連絡協

議会会長ヒアリング。2月、陸前高田市にて陸前高田市議会議員、滋賀県青年団員ヒアリング。東京日本青年館で福島県いわき市の青年団員ヒアリング。

(2) 記録冊子の作成

ヒアリングをもとにした記録、およびその記録についての討議や意見交換の記録を冊子にまとめた。これは、ヒアリングに協力してくれた青年たちが震災後の自身の暮らしと活動を立て直す一助になることを期待するものであり、同時に歴史の記録ともなることを意図した。

(3) 歴史資料の収集・整理

震災後の地域の変容・地域の再編をとらえるには、震災前の歴史についての知見を欠くことができない。岩手県陸前高田市および大槌町を対象として、地域と青年団の震災前の足跡を伝える歴史資料の収集・整理に着手した。陸前高田市および大槌町は、現在も地域青年団活動が展開されているが、津波被害によって、その歴史的資料のほとんどを喪失した地域であることから、本研究によって収集・整理する歴史資料は当該地域の青年団に還元することも意図している。

(4) 分析・考察の視点

以下の視点で分析・考察を行う。

① 経験の表現と共有化および記録化の意味

青年たちによる表現とその受けとめあいの過程を記録化することが、青年たち自身にとって、また地域共同体にとってどのような意味を持つのかを考察する。

② 青年が直面した問題と青年集団の課題

東日本大震災をどのように体験したか、またそこで青年たちが何を感じたか、さらに3.11以後の暮らしの現実、を累積することによって見えたものを青年が直面した問題、青年集団の意義と課題について検討する。

③ 地域横断的な青年ネットワークの意義

地域に根ざした青年団が地域を越えたネットワークを形成することによってどのような意義があるのか、東日本大震災の経験をもとに考察する。

④ 地域社会と青年・青年団との関係

地域共同体と青年集団とのかかわりを整理する。地域共同体にとっての青年集団がどのような存在か、(青年集団を通した)青年にとっての地域共同体がどのような存在かを、歴史的な視点を導入しつつ検討する。

4. 研究成果

(1) 継続的なヒアリングの実施と記録冊子の作成

ヒアリングや座談会を継続的に実施するとともに、それらの記録を収録した記録冊子『生きる～東日本大震災と地域青年の記録～』第1号(2012年3月、124頁)、同第2号(2013年3月、157頁)を作成した(日本青年団協議会との共同製作)。ヒアリング協力者

(手記執筆者含む)は、岩手・宮城・福島の沿岸部地域の青年だけでなく、北海道から沖縄までに渡った。

(2) 歴史資料の収集・整理

岩手県陸前高田市については、市史など先行研究にあたるとともに、陸前高田市青年団協議会編・発行『萌える 三十周年記念誌』(1986年)を入手することができ、その一部を現在の陸前高田市青協メンバーに還元することができた。また、陸前高田を含む気仙地方の地域新聞『東海新報』のバックナンバーにあたり、1990年代以降の「青年芸能祭」(陸前高田市青協主催)の足跡を明らかにすることができた。これもその資料を同メンバーに還元した。

(3) 分析・考察(概要)

(本研究は平成25年度以降も継続して取り組んでいるため以下に述べるのは、暫定的あるいは中間報告的な整理である)

① 経験の表現と共有化および記録化の意味

a) 経験の表現と共有をめぐって

定点観測的・継続的に自らの経験を語る・書くといった表現の場を設定してきた。2年間をふりかえってみると、その内容のみならず表現の様態の変化が際立っている。全体的な経過と傾向を記せば次のようであった。

まず震災直後(2011年3月以降一年以内ほど)は、各々の壮絶な体験が怒涛のように語られた。それはまさに死と隣り合わせの稀有な出来事であり、「これが宮城県沖地震か」「いつ来るかと思っていたが、いよいよ来たんだな」と地震や津波への心構えは持っていたものの、突然に、そして否応なく強制的に巻き込まれた事態であった。その体験の表現は、かなり興奮状態にあるように聴き手には感じられた。また話がひじょうに具体的で詳細だったのも鮮烈であった。ほんの数分間の出来事なのにもかかわらず、事細かに、順序を追って、その時の情景や誰かが発した言葉までも、実に細かく記憶に刻まれていた。誰かに伝えたい、聞いてほしいという強い欲求(本能的な欲求か)に突き動かされて語る場を求めているようにも思われた。この時期の内容は、とにかく3.11をどう生きのびたか、生き残ったか、ということに集約されている。ただしすべての者が同様であったわけではなく、当然のことながら同じ青年団員のなかにも、震災時のことを語らない、語りたくないという者もいた。なお、これらは、調査者らが被災地の「外部」であるがゆえに出会った光景であって、被災地内では語れない、語ることができない、語りにくいという状況であったことも想像できる。

その後、震災からしばらくたって3.11の体験を語る場に同席したが、その頃には、それを語ることで、忘れまい、忘れまいとしているように感じられた。彼/彼女たちのなか

には、それは忘れてはならないこと、語り継いで行かねばならないこと、としてあるようであった。しかし、その中身は、できれば忘れたくないこと、思い出したくないこともあり、表現行為は過酷で精神的負荷がかかるものでもあった。語らねばならない、伝えたいという思いと、思い出したくない、忘れたくないという思いとの狭間に置かれながら言葉を発していたと言える。

表現行為には相手が存在する。今回の経験の表現には青年団というコミュニティ(場)が前提となっている。語る者は、「同じ青年団の仲間」に向かって語っていた(調査者も震災以前から青年団の学習活動に助言者としてかわり、被災地の青年たちのなかには震災以前から継続的な関係を持っている者もいた)。ある青年は、青年団だから今回表現することができたと言っている。青年団だからというの、地域は違っても「同じ青年団」という仲間意識が存在していたことに加え、語り合い話し合う場(学習)を伝統的に大事にしてきたのが青年団だということがある。語り合い話し合いは、とにかく「その人」をまるごと受容するという文化であり、その文化を共有している空間の存在が表現の前提にあったことを指摘したものである。

震災後一年を過ぎると、内容の重点は震災当日のことからその後の生活や地域のことになり、その表現は被災地のことを忘れないでほしい、震災を風化させないでほしい、被災は今も続いている、という思いに突き動かされたものとなっている。他方、各人が直面する問題によっては自身に関して語ることができなくなった者もおり、その問題の大きさ、共有することの困難さを物語っていた。

東日本大震災の被災地は広範に渡っており、当然のことながら人びとの被災も一人ひとり異なっている。今回は、単にヒアリングとして個々人の経験を調査者が個人的に聴き取るのみならず、多様な地域の多様な被災体験を相互に共有するという方法を組み込んで研究を進めた。これは、地域を越えた全国的なネットワークとして日本青年団協議会との共同的な取り組みとしたことによって可能となっている。その結果、直接的な被災という点では、北海道から東京までの経験を拾い上げることができた。大災害では災害を被っている渦中にある者ほど災害の全体像を把握することが困難である。なぜなら電気や電波にアクセスできないために当時のメディア報道に接することができないからである。そのような青年団員たちは自分とその身の回りの体験をもとにして震災を認識しているともいえる。そのため経験の共有化は、自分以外の他の人の多様な被災体験を知り、それと重ね合わせながら自分の経験を東日本大震災全体の中に位置づける手がかり

となっていた。したがって、言葉や文字を発する者が、同時に聴き手や読み手にもなることは(数人でのヒアリング、座談会、記録を冊子にして読むことによって)、青年団員たちにとって大きな意味を持ったように思われる。

c) 記録化をめぐる

記録化の方法は次の3つの方法から選択された。それは、自ら書く方法、自分の語りか文字化されたもの(テープ起し原稿)を元に自分で書く方法、聴き手が編集し書く方法、である。個人的な体験を記録化する作業は、青年団や日青協が、青年問題研究集会など60年近く取り組んできた共同学習の蓄積を踏まえて行われた。

書き手(語り手)たちにとって記録化が持つ意味は次のようであったと考えられる。

まず一つに、事実の伝承である。そこには、無念さ、悔しさ、二度と繰り返してほしくないという強い気持ち、生かされたものとしての使命感などがある。「一人の人として、やっぱり、命もらってるんだから、生き残ったから、後ろの人に伝えなきゃいけないよね。(略)震災で、無事に…無事にでもないけど、生きてた者として伝えるのは当然だと思う」。なお陸前高田市では青年団が立ち上げた「桜ライン311」の取り組み(現在はNPO法人化)が展開中である。これは今回の津波の到達点に桜を植え、それをラインのようにつなげることで後世に伝えるというもので、その主旨には冒頭に「私たちは悔しいんです」とある。これもまた震災経験の記録化の表現方法だといえる。

書き手(語り手)にとっての記録化の意味の二つめは、本人の気持ちや心の整理である。「震災によって多くのものを失い、あまりの出来事に対して自分自身が今後どのように向きあっていけばよいか心の整理ができていませんでした。そんな時、大震災の体験を綴るという日青協の取り組みに参加することによって、自分自身の気持ちを整理し、前へ踏み出すきっかけを作ってもらったと私は考えています」と綴られている。

読み手にとっての意味は次のように整理できる。

一つは、震災の現実をリアルに、しかも自分と同じような地域の青年の目線と言葉で具体的に知ることができるということである。現地に行ったり講演会・学習会に足を運べずとも読むことによって知ることができる。記録を読むという行為の特徴は、一人で行うという点、何度も読み返すことが可能だという点にある。

二つは、後述のような内容を自分の経験や生活・仕事・地域活動(青年団含む)と照らし合わせながら考えるということである。それは、単に、被害であつてたいへんそうだと

うような他人事としてではなく、次は自分がそういう状況に陥るかもしれないというように我が事としての読み方であった。災害からどう身を守るかという避難や、災害後の緊急救援期をどう乗り越えるかといった様々な問題の知識と経験は直接的な説得力を持ち、またそこで奮闘する青年たちの姿に読み手は胸を打たれている。青年団活動や地域社会のあり方についても再考を促されている。

②青年が直面した問題と青年集団の課題

今回、ヒアリングや記録によってその経験を共有することができた青年(一部青年団 OB含む)は26人(女性7人、男性19人)であった。その職業(震災前)は、会社員(メーカー工場、ガソリンスタンド勤務、信用金庫、印刷会社、造船会社、教育産業、漁協職員、葬儀社、放射線測定関連機器販売会社、電気店)、公務員(自治体職員)、自営業(農業、漁業、植木屋)、老人介護施設職員、無職であった。

東日本大震災によって様々な問題が生じている。今回のヒアリング等によって突きつけられた問題から以下では3点を示す。

a) 消防団員としての過酷な任務

青年団員の男性のなかには地域の消防団に入っている者がおり、震災直後から消防団員としての任務に就いていた。予め決められている任務の内容は、もちろん地域・分団によって異なるが、今回のヒアリングでは、災害発生時では、水門の開閉、住民の避難誘導、山崩れ・土砂崩れへの対応に出動していた。水門の開閉については、「開」まで水門にとどまって津波警報が解除されたら直ちに開けることまで任務に入っていたため、陸前高田では、その任務についていた青年(青年団員)が亡くなった。彼は、水門近辺の交差点で信号が停電して混雑している車の交通整理をしていたとされる。また地震や津波が収まった後は、被害を受けた場所の復旧・復興を担うことになるが、今回の東日本大震災では、自衛隊と共に遺体捜索活動に出動し凄惨な現場に数十日間も通いつづけなければならなかった。(地域によっては、自衛隊は遺体発見までを担い、発見された遺体を引き揚げて運び出し警察に引き渡す作業を消防団が担った)その経験は過酷なものであった。

「重機をつかい、瓦礫の撤去を行いながらの捜索活動は、凄惨なものでした。遺体が五体満足で見つかるのはまず稀でした。体の一部分だけといった状況も多々ありましたし、何より知っている方の遺体を引き上げる作業がつかった。数週間は満足に眠る事もできませんでした。あの時の記憶は一生消えないでしょう。毎日そうした光景を見て歩くと、気分が滅入っていきました。どんどん、どんどん、自分がおかしくなっていくのがわかるので、なるべくそういうことを考えないで、何か面白いことを、楽しいことを考えてない

と、自分がおかしくなっていく気がしたのです。」「朝8時から夕方5時までは遺体捜索と遺体搬送、5時に帰ってきて9時に寝る毎日。ご遺体捜して、ご遺体運んで。まさか消防団で、それをやるとは思わなかったけど。最初、自衛隊の人が来てるから、自衛隊がやるのかなって思ったら、そうでもないし。あーって。(略)眠れなかったりとかはありました。今もありますけど、一ヶ月に何回かは。遺体を運んでる夢を見たり。PTSD、心的外傷ストレス障害、かなり多いと思いますね。」

地域の施設で避難民の受け入れの業務を担う消防団もあった。福島県内では、避難民の鬱憤を向けられ、終わりの見えない活動に疲弊していく経験が綴られている。

これら消防団員は、地域の役割として自分の生活や仕事とは別に自主的に引き受けになっているものであるが、今回、被災地の青年たちは、このように過酷な任務を担った。

b) 失職・失業

26人のうち5人が今回の震災を直接的なきっかけとして失職した。うち2人は、職場が津波で土台もろとも流され、別の1人は、その雇用主も亡くなったため、仕事を失った。1人は、避難所→借り上げ住宅→仮設住宅と居を移し、仕事はNPO法人スタッフ等をしている。もう1人は、震災後数ヶ月間は消防団としての活動を担い、その後、瓦礫撤去・運搬を行う市の臨時職員をしている。

また別の1人は、津波をかぶったものの職場自体は存続したが、自宅待機の後、何人かが解雇された。その解雇された者のなかに自分が入っていたという事実は重くのしかかっている。いったん全員解雇の後、「皆さんをもう一度呼び戻したい」という社長の言葉を信じて待ち続けていただけに大きな精神的ショックを受けている。

他方で、同僚が解雇されるなか残った者として、また労組役員でありながら組合員の雇用を守れなかった者として忸怩たる思いにさいなまれる者もいる。「去るも地獄、残るも地獄」と表現する被災地の雇用をめぐる状況は深刻化を増し生活基盤を揺るがしている。「被災地域で色々な企業が倒産、あるいは撤退するような状況で、特に失業率を含めて雇用関係には様々な問題があると思います。そこで政策的に青年の声を伝えられるような状況を作れないものか?それができるのが青年団ではないかと思うことがあります。私たちは大規模災害発生時に、第一段階の人命救助や第二段階のライフラインの整備をすることはできません。では何ができるのかといったら、今からの第三段階で政策的なこと、あるいは今の地域の状況を訴えることだと思います。将来を見据えた地域づくりの話し合いの場の中に、私たちの雇用と生活環境の現状を積極的に伝えることができる

環境づくりが今後、必要になってくると強く感じています。」

c) 地域の分断

震災後1年以上がたったところで、それまで共に頑張ってきた地域の人びとの間に目に見える断絶と格差が生じるようになってきた。困難はありながらも「同じ被災者」として手を取り合ってやってこられていた地域住民も自分の生活再建をどのように行うかという次の段階にいたって厳しい局面に立たされている(もちろんそれ以前にも被災の程度や支援受給の進捗によって序列付けをするようなまなざしから自由ではなかったが、仮設住宅に入るといった方向性を共有することはできた)。

福島県や放射能汚染被災地では状況はさらに錯綜し分断も厳しさを増しているように見えた。東京電力福島第一原発からの避難者を多く受け入れているいわき市では、地元住民のなかでも震災被害の状況は多様であったが、加えて新住民との間に様々な軋轢が生まれていた。「地元の高校の先生が、これから卒業して社会に出て行く生徒たちに、『今、お前たちが見ているのはバブルの時代だ』って言ったそうです。なるほど、うまいこと言うなと思って、『これはいわきバブルだ』と。外の世界は全然違うよと。賠償金をもらっている人たちがたくさんいるから、お金を落としてくれて町は今、すごくにぎわっているんです」。こうしたなかで地元の伝統芸能「じゃんがら念仏踊り」を継承する若者たちの活動はたいへん貴重なものと言える。青年団の課題

以上のような問題に直面しながら青年団は、今、どのように歩んでいるのだろうか。震災後2年という短い期間ではあるが、青年団が震災後の活動のなかで大事にしているものや新たに取り組んでいるものを列記してみる。

■東日本大震災の体験の記録化と継承(「桜ライン311」、宮城県青年団の取り組み等)

■芸能や文化を柱とした地域の復興(陸前高田市青協の青年芸能祭、宮城県団の青年文化祭、いわき市の各地域青年団のじゃんがら念仏踊り、その他各地域での伝統芸能)

■震災後のまちづくりへの参画(陸前高田市青協の市長との懇談会)

■震災後の新住民や支援ボランティアとの交流(大槌町青年団の取り組みなど)

③地域横断的な青年ネットワークの意義

震災支援活動という点では個々の青年団員が所属し活動する避難所へのメールを使用した的確な支援物資の送付ができた。震災経験の共有と記録では、「外」の仲間に語るといった場で表現が促された。また経験の共有も直接的な青年団員の行き来によって震災2年目以降むしろ活発化してきている。また東南

海地震などへの備えや防災に関する直接的な示唆として今回の震災経験が各地で青年団を通じて継承されつつあるとともに過疎や高齢化で疲弊する地域のまちづくりとそこで青年たちについて考える文脈でも今後さらなる学習や実践の展開が期待される。

④地域社会と青年・青年集団との関係

陸前高田市において青年団は、戦後直後より活発な活動を展開していたことがわかった。その経験者たちが現在の町政や地域のリーダー的存在として活動していることから、震災のなかでも青年団ネットワークが有効に機能したといえる。世代を超えたつながりによって現在の青年団は支えられており、陸前高田市青年団体協議会が現在展開している「桜ライン3.11」の取り組みもまた青年団に対する地域住民の信頼と期待によって支え促されていることも見えた。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計0件)

[学会発表] (計3件)

- (1) 辻智子「地域共同体の変容と青年集団(その2)―岩手県陸前高田市の状況から―」日本社会教育学会(自由研究発表)、2012年10月7日、北海道教育大学釧路校
 - (2) 田中潮・辻智子「生活・地域の復興と青年―地域青年団・日青協・助言者集団―の共同的な関係による実践と研究の模索―」日本社会教育学会(特別シンポジウム)2011年9月17日、日本女子大学
 - (3) 辻智子・藤田美佳「地域共同体の変容と青年集団―東日本大震災に直面して(その1)―」日本社会教育学会(自由研究発表)、2011年9月17日、日本女子大学
- [図書] (計2件)

- (1) 日本青年団協議会・『生きる～東日本大震災と地域青年の記録～』編集委員会(代表・辻智子)編・発行『生きる～東日本大震災と地域青年の記録～』第1号、2012年3月
- (2) 『生きる～東日本大震災と地域青年の記録～』編集委員会(代表・辻智子)編・発行『生きる～東日本大震災と地域青年の記録～』第2号、2012年3月

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

○取得状況 (計0件)

[その他]

ホームページ等 なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

辻智子 (TSUJI TOMOKO)

東海大学・課程資格教育センター・講師

研究者番号：20609375

(2) 研究分担者 なし

(3) 連携研究者 なし

以上